Morse、E.S.　1901　Catalogue of the Morse Collection of Japanese Pottery. Charles E. Tuttle Company Rutl and、 Vermont & Tokyo Japan.
窯業史博物館 1998『水戸の烈公と小砂焼』

図表出典

第1図　『茨城県遺跡地図』1:25、000「36　水戸（R)」に加筆。
第2図　水戸市都市計画図1:2、500に加筆。
第3図　幕末と明治の博物館寄託資料（水戸市立博物館1984の企画展チラシの該当部分をスキャナーで取り込み)
第4～8図　筆者撮影。
第9図　ボストン美術館ホームページの所蔵資料検索ページ
(http://www.mfa.org/collections//search_art.asp) よりダウンロードしたデジタル画像を転載。
第10～12図　所有者の方のご厚意により撮影させていただいたデジタル画像（Nikon社製D70による）を掲載。
第13～15図　ボストン美術館ホームページの所蔵資料検索ページ
(http://www.mfa.org/collections//search_art.asp) よりダウンロードしたデジタル画像を転載。
第16･17図　(Morse、E.S.　1901) より転載、加筆。
第18図　(窯業史博物館　1998) 表紙原図をスキャナーにより読み込んだものをAdobe社製Photoshop5.5 (Macintosh版) により加工。
第19図　(株式会社ゼンリン 2006) より転載、加筆。
第20･21図　筆者撮影。
第1表　(大川　1985)、(窯業史博物館　1998) を基に筆者作成。

萩藩毛利家屋敷跡遺跡

小坂井　孝修
(東京都埋蔵文化財センター)

遺跡の位置と環境

遺跡は港区赤坂九丁目７番５号に所在し、武蔵野台地東端、淀橋台の一部である赤坂台の、開析された谷に囲まれた台地上に位置する。

当地は、江戸時代には萩藩毛利家の麻布屋敷にあたっていた。寛永13年(1636)に拝領されてから、幕末の動乱期に国元に引き上げることによって幕府に返還された元治元年（1864）まで、約230年間屋敷を構えていた。明治時代以降は陸軍の施設が設けられ、昭和時代になり防衛庁の敷地に引き継がれた。

調査の目的と経過

発掘調査は、防衛庁跡地の再開発事業に伴うもので、東京都埋蔵文化財センターによって、三井住友・鹿島・大成建設共同企業体の調査支援のもとに、平成14年４月から平成15年７月まで実施した。調査後は、引き続き平成17年３月まで整理・編集作業を行い、東京都埋蔵文化財センター調査報告第162集として刊行された。発掘調査面積は、47,469㎡である。

遺構と出土遺物

遺構　旧石器時代・縄文時代・古墳時代前期－礫群や住居跡など

江戸時代－礎石跡、建物基礎、石組遺構、石垣、石組溝、溝状遺構、柱穴・ピット（含柱穴列）、土坑（含大土坑）、地下式土坑、井戸、上水施設（含枡）、埋甕、配石、段切り、畝状遺構（第1表）

近　　代－礎石跡、土坑

遺物　旧石器時代・縄文時代・古墳時代－石器・土器など

江戸時代－陶磁器、土器、土製品・ミニチュア、石製品、銭貨、金属製品、骨角製品、硝子製品、木製品・漆器類（第２表）

近　　代－陶器、硝子製品、漆容器、徽章類他

江戸時代の遺構：本遺跡は、明和５年（1768）や明和年間以降と考えられる麻布屋敷に関する絵図が残っており、屋敷の建物配置・利用状況などを窺い知ることができる。各絵図と比較すると、遺跡調査範囲は、屋敷の西から北側の一部を除きほぼ屋敷図と重なる。第２図の絵図に見られる建物・施設は南西域から中央には、表御門、表長屋、老中固屋、作事固屋、長屋、表御殿・長局などの建物関係施設など。南東域は、表長屋部分は外苑東通りへかかる。東御門から屋敷中央部の長屋、東御殿・長局などの建物関連施設、御花畑や御庭と連なる通路施設など。北域は長局や大番詰所、中間固屋、仕用人建物から空白域（林）になる。調査対象外になるが、絵図には北東域は庭園と得一亭、厩舎、馬場など。北域に圓明院・天神社、根谷長屋、番固屋、小姓固屋など各建物があった。

以下、いくつかの遺構について概観していきたい(第１図)。

Ⅰ区の遺構：南西側の調査区で、表御門、表御殿への通路、表長屋、作事細工固屋などの区域の西側と、東御殿の一部に相当する。

南西域では、柱穴列は表御門や通路、表御殿、固屋、長屋などに伴う施設に。石組溝は建物や施設の区画部に見られ、部分的な造替えか増設も行われたようである。井戸は各絵図と同位置にほぼ検出された。地下式土坑や土坑、上水施設は、長屋や固屋など建物と塀の間に位置すると考えられる。また、建物基礎はほとんどが礎石と考えられるが、ここでは根石を持つ柱穴以外ほとんど残っていなかった。

そのような中で、17世紀代からのものと思われる道路状遺構が検出されている。表御門脇より西

側へ東西方向に約80m延び、両縁に平石組の溝と等間隔に並ぶ柱穴列（塀？：時期差があるか）を伴う幅約２ｍのものである。検出状態から、屋敷内に設けられていた道路に相当し、表長屋と固屋、表御殿側の空間を分けていたものであると想定される。

東御殿部も礎石部はなく、土台部と思われる砂利詰めの窪みや根石のある柱穴列が見られた。井戸は絵図の位置に重なる。建物の周囲には井戸や地下式土坑などがあり、東御殿より古段階の土坑なども検出された。

Ⅱ区の遺構：南東側の調査区で、東御門から東御殿東側と長局などの建物部分、屋敷中央の御庭から東域の厩舎部分に相当する。

東域では、東御門の南西側に当たる部分に18世紀後半以降の数段の石組みと石組み溝と、それらの遺構の下からは、18世紀前後の礎石建物跡や地下式土坑、土坑などが検出された。

南東から南域は、長局や長屋関係の施設が主体で、柱穴列や石組溝などが検出され、それらの間に地下式土坑や大土坑、土坑（481基：土坑群全体の約36％）が検出された。地下式土坑や土坑は東御殿や長局、長屋など建物裏の塀との間に位置する。土坑の規模は大小様々であるが、長局南辺では素掘りの方形土坑が多く、南東域の長屋との間の区域は階段付の地下式土坑が規則的に並んで検出された。素掘りの土坑には、底面に杭痕が残るものもある。また、大土坑群とした最大で約30×10m大の素掘りでスロープを有す深さは３ｍ以上の19世紀代の遺物を出土する一群もある。

北域は近代からの撹乱も多く、絵図でも御花畑や御庭部分で遺構は少ない。植栽痕や傾斜面に沿って勾配のついた石組み溝があり、東側谷部では、石垣と石組み溝が検出された。

Ⅲ区の遺構：調査区中央から北西にかけての区域で、表御殿と長局、蔵などの部分に相当する。

この区域は、近代以降に削平を受けたが、表御殿周辺の建物に係る柱穴列や土坑、上水施設などが検出された。また、屋敷地のほぼ中央部の位置に地鎮遺構がある。この遺構は屋敷が拝領された頃の17世紀中葉の所産と考えられ、地鎮祭を執り行って道具類を埋めたものと推定される。この土坑は、長辺約0.9、短辺0.6、深さ0.2mを測り長方形を呈しており、遺構内から輪宝1、金製の永楽通寶２、銀製の永楽通寶１、銅製の寛永通寶７、土器16点が出土している（第３・４図）。

このように道具類がそろって出土する例は稀であり、江戸時代の地鎮祭などの祭祀活動を考える上で重要な資料と言えよう。

上水施設は、溝と枡（18～20m間隔）、木樋（約５ｍ間隔）の継ぎ手部からなり、形状や規模からⅠ区から続いていると思われ、Ⅳ区で検出された方向へ伸びる溝部（一部木樋が残る）や東域に検出された施設へ続くものと想定され、敷設方向や時期の異なる上水溝が認められている。

Ⅳ区の遺構：調査区北から北東にかけての区域で、表御殿奥の長局や小書院、御寝所、御式台などの建物部分に相当する。絵図によっては空白（林）の時期もある。北東から東域は庭園への付帯施設や傾斜面になっている。

この区域は、柱穴列、石組溝、石組、地下式土坑、土坑、上水施設、溝状遺構など建物周辺に付随する施設が検出された。北東から東の区域には17世紀代から断続的に井戸や土坑、溝が構築され

た。上水施設は西域で異なる二系統が交差・方向する部分や東域のように枝分かれするものが検出され、敷設の時期や利用状況に差が想定される。

また、Ⅲ区との東境部分では庭園方向に向かって傾斜する谷が埋没しており、表御殿増設のある段階で造成したことが窺えよう。その谷の縁に位置するのが、地鎮祭に関連すると考えられる土坑である。

遺　物：17世紀代では、瀬戸・美濃、肥前、京都・信楽など一般的な陶器に混ざり萩焼が出土している。18世紀以降は前述の各産地に江戸近郊の陶器・土器類も見られようになる。全時期を通して萩焼と思われる製品も多種の器が見られ萩藩の屋敷ならではの特徴が窺えた。また、毛利家の家紋である「一文字三つ星」や「沢瀉（おもだか)」が付けられた瓦などが出土している。

ほかにも、地元の産業品として山口県下関産の赤間硯が見られ、高嶋産などの硯もある。産地は不明だがガラス製や骨角製の装身具や生活用品など多くの生活に関わる遺物が検出された。鹿角製品には、屋敷内で加工していると思われる未製品などもある。

調査成果

遺構の配置状況は萩藩毛利家麻布屋敷の利用状況を理解する上で重要な情報を提供している。17世紀の拝領初期から幕末期に至る、各種遺構の分布や変遷を追うことができる。特に、明和年間以降の絵図、文献などで屋敷の利用状況、絵図より古い時期の遺構などとの比較ができたと考える。

遺物では、江戸遺跡の通有の資料が出土している中で、萩藩特有の地元産の各製品もみとめられた。出土した萩焼の一部に、釉・器形が他産地の製品に酷似し、今後の再検討を期するものである。

引用・参考資料

大熊喜邦　1919　「麻布御屋鋪大差図私考」　『建築雑誌』第33輯　建築学会編

品川区立品川歴史館　2003　「特別展　しながわの大名下屋敷 -お殿さまの別邸生活を探る-」

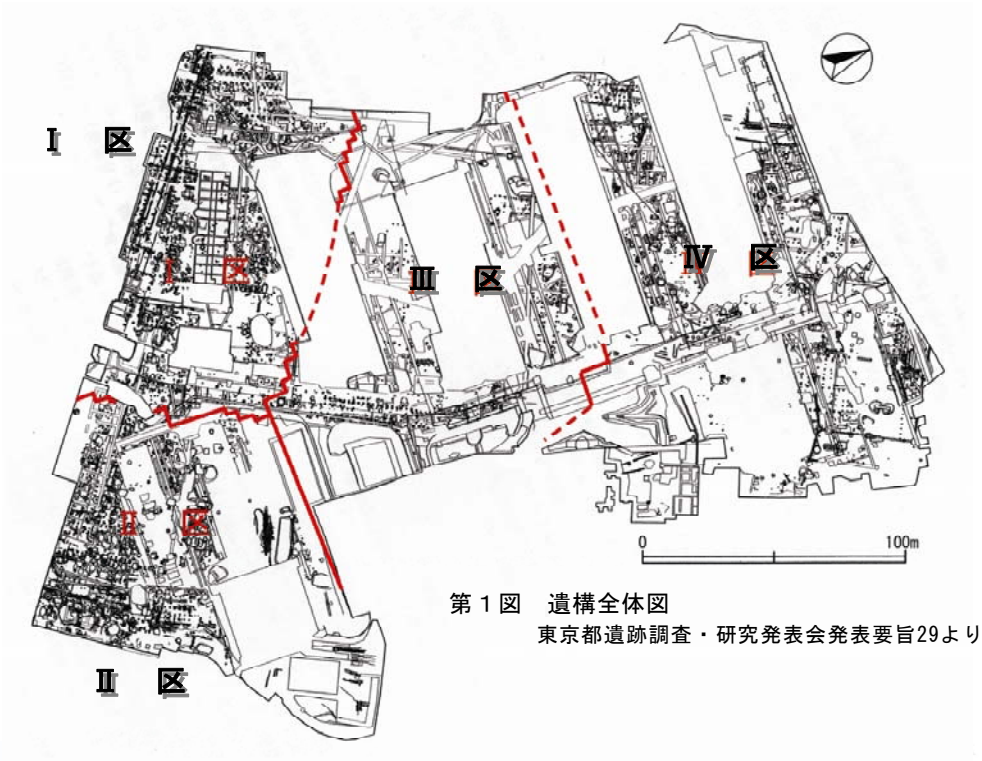
品川区立品川歴史館編　2004　『江戸大名下屋敷を考える』　雄山閣

東京都教育委員会　2004　「萩藩毛利家屋敷跡遺跡」　東京都遺跡調査・研究発表会発表要旨29

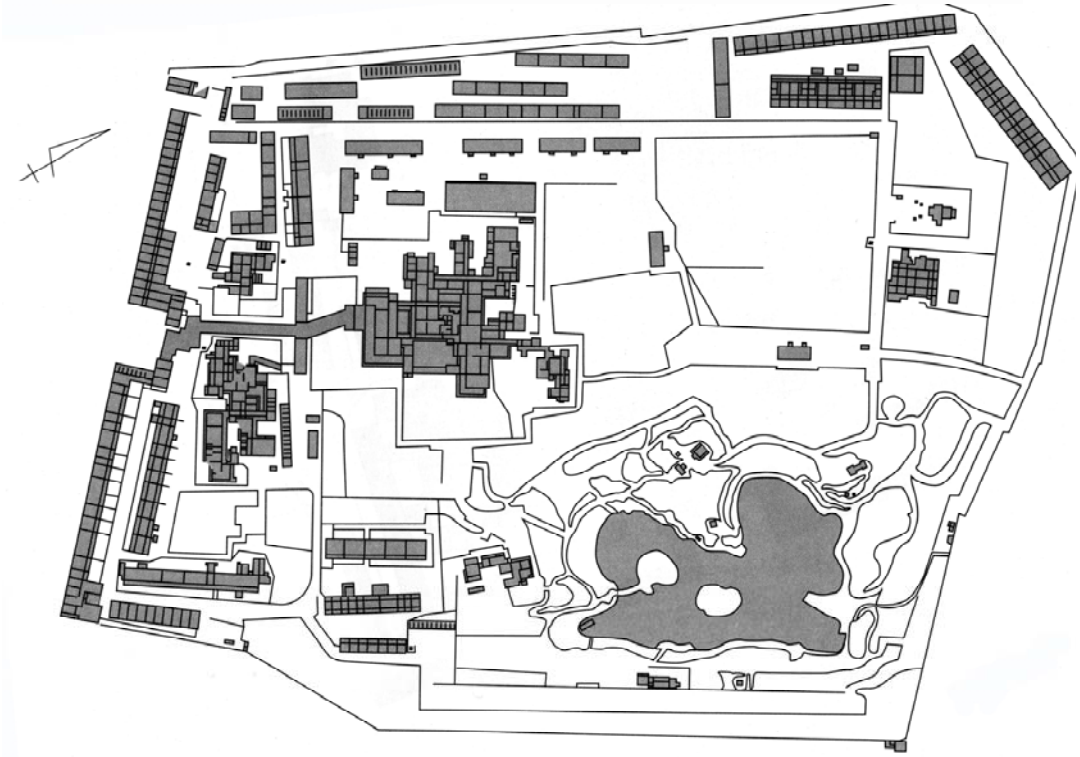
東京都埋蔵文化財センター　2005　「萩藩毛利家屋敷跡遺跡」　東京都埋蔵文化財センター調査報告第162集

宮崎勝美　2000　「大名屋敷の作事・普請と江戸遺跡」　第13回大会「江戸と国元」発表要旨差替

山本博文　1991・2003　「江戸お留守居役の日記－寛永期の萩藩邸－」　読売新聞社・講談社学術文庫

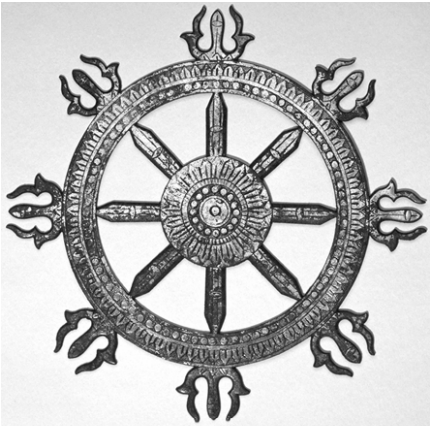


第１図　遺構全体図
東京都遺跡調査・研究発表会発表要旨29より



第２図　「麻布御屋鋪大差図」　大熊喜邦「麻布御屋鋪大差図私考」より

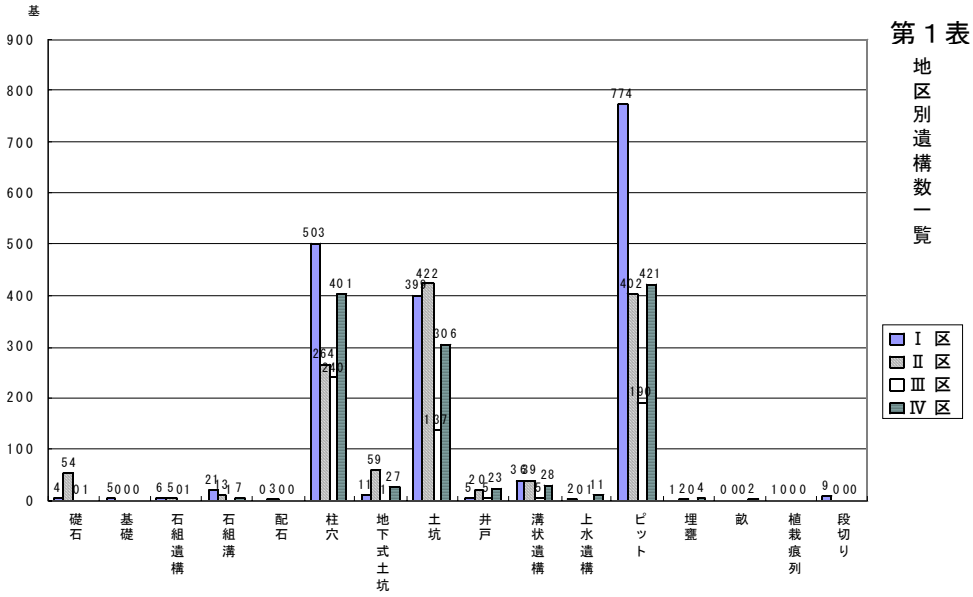
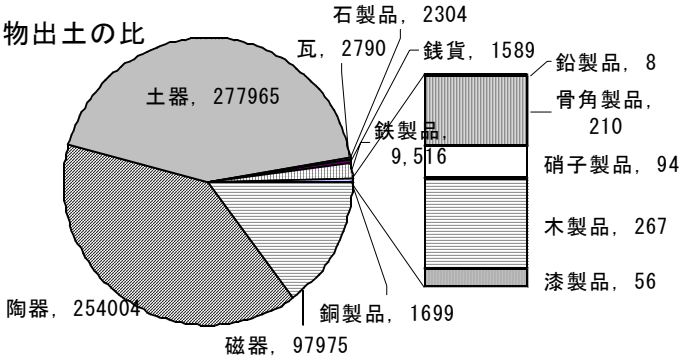
第３図　地鎮遺構検出状態（北東から）



第４図　鍍金青銅製輪宝

「萩藩毛利家屋敷跡遺跡」東京都埋蔵文化財センター調査報告第 162 集より

第１表　地区別遺構数一覧



第２表　遺物出土の比